平成 27 年度 第１回文京区協働推進委員会担い手創出プロジェクト支援本部
要点記録

日　時：平成 27 年 7 月 24 日（金）　午前 9 時～12 時 00 分
場　所：シビックセンター12 階　地域振興会議室

＜会議次第＞
１　開会
２　プロジェクトの選考方法について
３　プレゼンテーション及び質疑について
４　プロジェクトの選考について
５　その他
６　閉会

＜出席者（名簿順）＞
八木 茂 本部長（区民部長）、井上 英之 本部員、菊地　端夫 本部員、古矢 昭夫 本部員（区民課長）、阿部 英幸 本部員（協働推進担当課長）
【関係課】
榎戸 研 防災課長、福澤 正人 経済課長、熱田 直道 オリンピック・パラリンピック推進担当課長 兼務 観光・国際担当課長、鈴木 裕佳 高齢福祉課長、鈴木 秀洋 男女協働・子ども家庭支援センター担当課長
【事務局等】　区民課主査（１）、区民課主任主事（１）、パートナー事業者（株式会社エンパブリック）（３）

＜議　論（要点）＞

１　開会
八木区民部長：開会あいさつ
阿部協働推進担当課長：出席状況と資料について確認。安藤本部員、各務本部員、丁本部員は欠席。菊地本部員については、米国に滞在中のため、スカイプでの参加となる。

２ プロジェクトの選考方法について
阿部協働推進担当課長：資料第 1 号に基づき、対象団体について説明。支援候補プロジェクトのうち、9 団体から選考参加の申し込みがあり、そのうち一次選考を通過した 4 団体を対象に二次選考を実施する。審査は、1 団体当たり、プレゼンテーション 10 分、質疑応答 15 分の合わせて 25 分で進めていく。

３　プレゼンテーション及び質疑について
＜プレゼンテーション１＞
プロジェクト名：ブランクではなくギャップイヤー！～ライフイベントによる長期休暇がキャリア中断にならない文京区をつくる～
団体：NPO 法人 ArrowArrow
＜質疑＞
八木本部員：中小企業と働き手の両方に目を向けているということだが、モデルとしては、

働く人に本を提供することからプロジェクトをスタートするのか。

プレゼン団体：企業より女性社員が悩みを抱えていることが多いので、その女性社員の悩みを解決することから入れればと考えている。

井上本部員：働いている方と企業とのやり取りはあり得るのか。

プレゼン団体：実際にセミナーを受けた人が自分の会社に提案したり、評価面談の際にワークシートを使用したりする過程で、企業に当法人が呼ばれることがある。今回のプロジェクトでも課題を持っている人をハブとして企業の中にも入っていき、他の社員にも提案していければと考えている。

八木本部員：会社から報酬をもらうことはあるのか。

プレゼン団体：コンサルフィーをもらっているが、東京都では、中小企業がワークライフバランスに関するコンサルティングを受けると、それに対して助成金をもらえるという制度があり、このような助成金を活用することで、企業の負担を相殺できるようにしている。

井上本部員：このプロジェクトを実施することで世の中にどのようなインパクトを与えることができるのか。やりたいのは本をつくることではなく、その先にあることのはずである。また、なぜ今、文京区で行おうと思ったのか。文京区でやる意味や関わりを教えてほしい。

プレゼン団体：選択肢のあふれる社会の創造というのが当法人の理念であり、これまで戦力になり得なかった女性が働くことへの価値を作っていきたい。日本社会において言えば、労働力が衰退していく中で当たり前に働けて、価値が出せるということを広げていきたいと考えている。女性は守るものではなく、活躍できる人である。制約のある女性でも働くことができるという事例をたくさん作ることで、日本社会全体の働き方について寄与していきたい。なぜ文京区なのかという点については、文京区は他の自治体と比較しても子育てがしやすい街であり、子育て世帯にとってとても評判がいい街である。これに加えて女性が働きやすい会社、活躍できる会社がたくさんあるという区になれば、もっと魅力的な街になり、女性にも企業にもいいことが起きるのではないかと感じている。職場と住んでいる場所が近いというのは、子育てのような制約のある女性にとっては大きなメリットである。例えば、再就職する女性だけでなくこれから子どもができる人にもよい。多くの自治体は、新しいことにチャレンジすることに対して消極的だが、文京区は前向きにチャレンジさせてくれるというのが私たちにとってとても魅力的である。今回、成功事例を示すことでもっとたくさんの他の自治体の参考になり新しい価値を創造することができるのではないかと考えている。

井上本部員：この 3 年間、新たな公共プロジェクトを回してきて、生態系ができつつある。前回の支援団体のポラリスなど全国的にも大事なテーマ抱えて活動している団体もある。これらの団体と連携していくことで、パッケージでソリューションを提供できたら、よりすごいことができるのではないか。稼ぐ場所と生活をする場所、昔でいう稼

ぎと勤めの場所が近いというのは重要なこと。男性が、生計を立てることにフォーカスをしてきたことで、不祥事が起きたり、イノベーションが起きづらくなっている。稼ぎだけでなく、近隣での勤め、家族での勤めが隣接している街、その代表として文京区でやってみるということではないか。文京区には中小企業がたくさんあり、住んでいる場所も近いということでとても意味がある。アローアローの事業において肝になっているのが、中小企業に対して、働きかけるということ。大企業に導入するのと中小企業に導入する際の大きな違いは何か教えてほしい。仕組みに落とし込んでいく場合に、大企業のような制度設計と何が違うのか。何がポイントなのか。

プレゼン団体：大企業と中小企業は、資本力において大きく違う。制度にかけるお金や人件費もあまりない。その中でより経営戦略であることを前提に制度設計に切り込んでいく。一人の人を失い、新しい人を雇い、教育することにどれほどのお金がかかってしまうのかということ、逆に女性を残すことによってどれだけのメリットがあるのかということをお金ベースで説明をし、理解してもらう。資金力が乏しい中小企業にとって、より切実な問題として捉えてもらいやすい。中小企業のいいところは、成功事例が出てからの組織変化のスピードが早いことである。1 事例出ることによって、劇的に変化をしたという中小企業を何度も見てきた。

菊地本部員：コーディネーター育成という事業面と団体の理念の間に距離があるのではないか。どのようなアウトカム、指標を作っていくのか。資料を見た段階では、女性を対象にするというよりは中小企業の社長がメインの顧客になるのかと思ったが、プレゼンの話や質疑応答を聞く中で、「多様な生き方を目指す女性」と「阻害する男性社長」というわかりやすい構図より、文京区に多い専門職や自営業の女性たちが、自分自身が阻害要因となっているところに気づきを与えるというソリューションの方が分かりやすいのではないか。

プレゼン団体：手に職を持った人については、事業対象というよりは、一緒に手を組んで、事業の幅を広げていく相手だと思っている。

鈴木男女協働・子ども家庭支援センター担当課長：応援するチャンネルはいくつあってもいいので応援をしたいとは思っている。ただ、家庭支援センターの仕事の中でお母さんたちに関わっていると、バリバリキャリア系の人ばかりではなく、様々なことに悩み、困っている層の人に会うことが多い。アローアローが対象としているのは、キラキラのバリキャリの人なのか、それとももっと困っている層も対象なのか。全部の層にアプローチしていくことは難しいと思うので、その辺りを教えてほしい。プレゼンでの事例は、法務的な観点からみると、マタハラに相当する事例である。アローアローとして、法的な観点から解決していくのか、それとも本人に知識や交渉力を身に付けてもらうことが目的なのか、はたまたアローアローが企業との間に立って代理人的な役割を担うのか。その辺りがはっきりしていない。

プレゼン団体： 誰にでもできることではないというのは感じている。層によって、別事

業でアプローチをしている。ママインターンの事業ではバリキャリ志向でない方を対象にしているし、働き方デザイン本ワークショップの対象は、バリキャリ志向ではあるが、子育てと仕事を両立しているスーパーロールモデルにもなりきれない層を対象としている。事例のケースでは、私としてもマタハラ事例だとは思ったが、相談者の思いを聞くと、そんな会社でもそんな風に言われてもこの会社で働き続けたい結果を出したいということであった。そうであるならば、喧嘩をするのではなく、どうすれば彼女にとっても会社にとってもより良い状態になるか、上手く交渉するためにどうしたらよいのだろうという点でアプローチをしていった。もし、企業と戦いたいという思いの方であれば、プロボノの弁護士であったり、専門家を紹介していく。アローアローのワークショップに来る人は、その会社に残って頑張りたいという人が多い。

鈴木男女協働・子ども家庭支援センター担当課長：文京区が子育てしやすい街だと言っていたが、どのような点にそう感じるのか。

プレゼン団体：例えば、バウチャー制度に力を入れているし、待機児童の数も周辺区に比べて少なく、また子育てに関する団体数もトップクラスだと感じている。

＜プレゼンテーション２＞

プロジェクト名：ぶんきょう・いんぐれす

団体：ぶんきょう・いんぐれす

＜質疑＞

古矢本部員：拡張性は高いものだと思うが、スマホやゲームというものに対して、アレルギー反応が出る人もいる。若い人や中高年などスマホに日頃から触れている人は大丈夫だと思うが、高齢の人、例えば町会の人などにイングレスをアピールしたり、周知したりするのをどのようにやっていくつもりなのか、教えてほしい。

プレゼン団体：今、イングレスを使用している商店街は、分からないけれどとりあえずやってみよう、というところから始まっている。地域に話をしていく中で、人なんか集まってこなくてもよい、イングレスに興味はないという地域も多い。とりあえずやってみようという地域から始めて、成功例を作って、他の地域にも広めていきたい。

井上本部員：イングレスと同じようなロゲイニングのゲームを取り入れたことがあるが、歴史や街や商店などを知る手法としてとても良いものだと思っている。ビジネスモデルが心配だが、収入はどのように得ているのか。

プレゼン団体：現状は、アマゾンのアフィリエイトとグーグルアドセンスの収入のみで、1 万円程度である。

井上本部員：プレゼンの中で伊藤園が公式スポンサーという話が出てきたが、公式スポンサーというのはイングレスのスポンサーなのか。イングレスはどこが運営しているのか。

プレゼン団体：イングレスはグーグルの子会社が運営をしており、公式スポンサーはあくまでもイングレスのスポンサーである。伊藤園では全国の自動販売機をポータルにし

たり、ローソンでは、店舗を全てポータルにしている。

井上本部員：ぶんきょう・いんぐれすと、イングレスの関係はどのようなものなのか。契約を結ぶなどしているのか。

プレゼン団体：イングレスについて、グーグルと契約を結ぶなどはしていない。自由に使ってくださいという形で提供されているものなので、ぶんきょう・いんぐれすでは、イングレスというプラットフォームを使って、地域に人を集客する、何かを動かしていくということを行っている。各地域で同じような団体が生まれ、活動をしている。その中の一つの団体という位置づけである。

菊地本部員：どうやって稼ぐのかという事業モデルの部分が弱いように感じる。また、横須賀や岩手県でも取り組んでいるが、もともと観光資源を持っているところに、イングレスのようなストーリー性を足すことが観光や販促事業に繋がるのだと思うのだが、文京区にはどれくらいの潜在的な可能性があるのか。

プレゼン団体：文京区は史跡も多く、街歩きも盛んな地域なので、そのポイントを回るようなコースを作っていきたいと考えている。

菊地本部員：事業規模にも関わってくることだが、文京区らしいストーリーはどれくらい作れるのか。

プレゼン団体：歴史と文化を歩く散歩道といったような、イングレスの仮想空間と実際の歴史・文化を結びつける仕組みを作りたいと考えているが、そこまで手が回っていない状況である。

菊地本部員：地域でパートナーを作っていくことも重要ではないか。

プレゼン団体：興味を持つ小さな団体が出てきているので、そういった団体にお声がけをしている段階である。谷根千の不忍ブックストリートという団体からはいい返事をもらっている。

鈴木高齢福祉課長：独居老人についての話がプレゼンの中でなかったので、説明をお願いしたい。

プレゼン団体：関口・音羽地区でイングレスの活動をする中で、毎日街を歩いているので、それを利用して独居老人に声をかけたりできるのではないかというアイディア。実際にやるかどうかは決めていない。町会の役員の方から独居老人の問題について、相談され、リストはあるということであった。

鈴木高齢福祉課長：高齢福祉の立場から言うと、独居老人の方は詐欺等の被害にも遭いやすく、個人情報についてはとてもナーバスである。普段人と関わりのない老人であった場合、どのようにコミュニケーションを取るのかといった問題もある。セキュリティや信頼構築については、どのように考えているのか。

プレゼン団体：関口の町内会でNPOを立ち上げて、私たちイングレスの団体も関わりながら、実施するという流れを考えている。個人的なやり取りの中で、地域の数十戸から初めて、需要があれば広げていきたいと考えている。

熱田オリンピック・パラリンピック推進担当課長 兼務 観光・国際担当課長：勝ち負けというのはどのように決まるのか。どのように陣地を取っていくのか。

プレゼン団体：2 週間に 1 度グーグルが集計を取っていて、世界的に青と緑どちらの陣地が多かったかが発表される。3 ヶ所押さえるとその空間が自分の所属する色の陣地になる。

熱田オリンピック・パラリンピック推進担当課長 兼務 観光・国際担当課長：どれだけ町場の人に理解を得られるのかというのが課題になってくると思う。観光や商店からの立場でいうと、理解を得られないとスマホを持った人達が勝手に私たちの街を歩くという良くない印象になりかねない。史跡などをポイントにしたとして、その近くの商店街に実際に人は足を運ぶのか。

プレゼン団体：江戸川橋商店街ではエージェント歓迎のチラシをお店の人が貼ってくれた効果で、ネット上で情報が広がり、あの場所は自分たちエージェントにやさしい町だということで、商店街を訪れる人が増えた。ただ、夜間にプレイをしている人もいて、必ずしも商店に寄っているという状況ではない。実際にプロジェクトを実施する場合には、昼間に企画をするので、商品にシールを貼るなど、エージェントが商店を訪れたくなるような工夫が必要だと思っている。

八木本部長：横須賀で実際に行った例もあるが、文京区で実施する場合、横須賀との運営形態はどのように変わってくるか。

プレゼン団体：文京区の方がポータル数は多い。人は多く集まると思っている。正直ベースの話だと、文京区役所の中の人がゲームを楽しんでくれないとプロジェクト自体が成立しないかもしれない。他の自治体の例がそうである。今週の日曜日には、区の職員も一緒に回るイングレス体験会を予定している。

＜プレゼンテーション３＞

プロジェクト名：まちのキャッチフレーズ、創って使い倒してずっとつながるプロジェクト

団体：文京かるた隊

＜質疑＞

熱田オリンピック・パラリンピック推進担当課長 兼務 観光・国際担当課長：自分の母が群馬県出身なので、幼少の頃、上毛かるたで遊んだことがあり、言っていることはよく分かる。地域のつながりや子どもの教育など様々な場面で活用していけるだろうと感じているが、色々な人や施設をかるたにした場合、当事者への了解を取ることが必要だと思うが、その辺りの認識をどう持っているか。

プレゼン団体：絵札について、特にそういった問題が生じてくる。1 人の画家が全ての絵札を作るのではなく、例えば、小学生が作ったり、観光協会の写真や絵ハガキ大賞、景観大賞とコラボしたりするなど、様々な人や組織が関わることを想定している。そういった方々と著作権についても相談をしながら、作っていきたい。

古矢課長：今回は文京区全域で行っていくということだが、こまじいの家のような小さなコミュニティやイベントであれば、成功しやすいのかもしれないが、区全域でやるとなると難しい面も多いのではないか。また、かるたのイメージとして、高齢の方や子どもは、使うイメージがあるが、20～30 代の人たちは本当に興味を持つのか疑問である。作るだけ作って、実際には活用されず人気が出ないという可能性もあるのではないか。

プレゼン団体：関係者をオール文京で巻き込んでいきたい。例えば町会の方など、巻き込まれた方は、自分の作ったキャッチフレーズが b-karuta で使われているという当事者意識を感じることができ、それを嬉しく思う気持ちから自らもかるたを使用してくれるのではないかと考えている。また、幼稚園や保育園、b-lab などにかるたを使ってもらえるように積極的に呼びかけていきたい。文京区全域で使われるように、まずは学生などを中心に進めていく。上毛かるたでもそうだが、競技をするのは中学生くらいまでで、プレーすることに興味が薄れてくるのは当然ある。世代が上がった方達には、何らかの形でイベントに関わるなど、まちづくりに興味を持って参加してもらうことを想定している。かるたのルールはとてもシンプルで、老若男女みんなで一緒に遊ぶことができ、一体感を生み出すことができる。イベントの際のアイスブレイクに使うなど、様々な用途で使っていくことができるので、小さい時に習得をしていれば、大人になっても活用していくことができると思う。

井上本部員：とても分かりやすい素敵なプレゼンだった。新たな公共プロジェクトに 3 年間参加をして、仲間を作り、小さなアイデアについて手を動かして、ここまで積み上げてきたことはとても凄いことだと思う。感謝をしたい。これをどう使っていくのかということが大切。上毛かるたは誰が主催して、どのように運営されているのか。公的な機関の後押しがあるのか。

プレゼン団体：公的な機関が担うようになったのは一昨年からで、それまではずっと一般社団の協会が運営をしていた。戦後すぐに作られたかるたで、民間が運営を担ってきた。

井上本部員：競技としての魅力も高いと思うが。

プレゼン団体：絵の記憶と文字の記憶で呼んだ瞬間にすぐに取ったり、遠くからでも絵の色で分かるなど、もちろん競技性も高い。しかし、それだけでなく、例えば東京で初めて会った人が同じ群馬出身だったりすると、読み札を使って、私の出身地は、沼田城下の塩原です、といったようにかるたのキャッチフレーズで自己紹介をしたりするように、遊んだ記憶が人とつながる際のツールになったりしている。そういった共通言語としての役割もとても魅力的である。

井上本部員：上毛かるたの事例は本当にすばらしいが、文京区で新たに始める場合、当てはまることと当てはまらないことがあるのではないか。私の感覚だと、子どもの方が取り込みづらいのではないかと思っている。IT ゲームなど他に楽しめる物が多い子どもより、普段 IT や iPhone を使用している大人の方が、かるたを新鮮に感じ、使ってみたいと思うのではないか。このプロジェクトでは、つくる、というのがキーワードになっ

ている。例えば、小学生が写生の時間の代わりにかるたを作るなどすると、自己肯定間に繋がったり、情緒的に落ち着くということもある。Expressive Art と社会問題の解決は非常に関連性がある。また、自分で作るとそのかるたを使いたくもなる。「つくる」というのを何らかの形で制度化することで、文京のまちづくりのベースにもなっていくのではないか。例えば、会社の中で年に一度は、部長の名前を入れて、社員全員でかるたをつくるなど。

菊地本部員：非常に情熱的なプレゼンであった。かるたは実際に紙でやると思うが、スマホかるたはどれくらい普及しているか。また、かるたを販売して事業を回していくということだが、みんなで作ったかるた、いわば素人が作ったかるたを売り物のかるたにどのように繋げていくのか。絵についても子どもたちが描いたものもあると思うが、上毛かるたはプロが描いたものだと思う。どのようにクオリティを確保するのか。

プレゼン団体：スマホかるたというのは聞いたことはないが、セカイカメラを作った会社がタブというアプリを提供している。お気に入りの場所を登録しておくと、GPS 機能で近くにいくとその場所が分かるというもので、このアプリとの連携は考えている。カードに QR コードをつけて、その場所の詳細情報がネット上で調べることができるというような工夫もしていく。また、それぞれの団体や場面で作ったカードをストックしながらも、年ごとに絵柄を変える等の変化を持たせる仕組みづくりを行い、作るということに関心を持ち続けてもらえるようにしたい。クオリティについては、キャッチフレーズや絵の選択をコンテストで行うことで質を高め、よりよい形をキープしていきたい。今まではこういったことができていなかったので、コミュニティ毎にかるたを製作してきたが、今回これを機にオール文京で、きちんとした製品化を行っていきたい。

八木本部長：製品とするかるたはどのように製造するのか。

プレゼン団体：文京は、印刷業が盛んなので、区内事業者等と相談をして、製作に関してもオール文京で作っていきたい。

＜プレゼンテーション４＞

プロジェクト名：「ようこそサカミチ in 文京 2023」（減災連携ステイクホルダーミーティングのモデル化とサカミチ観光開発事業）

団体：本郷いきぬき工房

＜質疑＞

榎戸防災課長：逃げ遅れ、生き埋めによる死者をゼロにする、という目標は、行政の取組にも沿ったものであるし、とても良いものだと感じた。その具体的な対応として、ステークホルダーミーティングでみんなが顔なじみになるということだが、実際に援助が必要な人達にどういったアプローチをすることで死者をゼロにするのか。

プレゼン団体：災害時要援護者名簿を持っている民生委員や町会の方とは、個人情報やプライバシーの関係で協力は難しいと感じている。実際に福祉施設等で当事者に話を聞くと、みなさんが災害に対して不安に思っているということが分かった。福祉施設や高

齢者サークルなど、当事者が集まっている機関にアプローチしていくのがいいと思っている。助ける側としては、企業や大学にいる人を考えている。災害時に帰宅困難者となる人は 13 万人いるが、実は、いざという時には、助ける立場になることができる人である。そのために、帰宅困難者を繋げる仕組み作りを考えている。

榎戸防災課長：これまでもそういった議論を本郷で行ってきたと思うが、実際に災害が起こったら、どのように具体的に動くのかといったシミュレーションがないと、理論の話し合いだけで終わってしまい、公共の担い手としては期待できることが少なくなってしまうのではないか。計画書では、春日・千石界隈まで活動を拡げていくということだが、これまで本郷エリアで活動してきて、練り上がったものがあれば、他のエリアに展開していくということもあると思う。本郷の活動の中では、どのような具体的な対応策を考えて、どのような体制を整備されたのかというのを教えてほしい。

プレゼン団体：本郷の中で、そういった体制などがきちんと整備できているわけではない。本郷でワークショップを行った際に、本郷エリアにおける一番のリスクは、本郷から春日にかけて道路・路上に人が溢れて、すし詰め状態になることであると防災の専門家から伺った。水道橋、春日、後楽園と 3 つも駅があることや、東京ドーム、シビックの大ホールがあることを考えると、ここで首都直下地震が起きたら、ものすごいパニックになる。これは住民にとっては大きな不安材料である。そういったリスクがあることが分かった以上、そのリスクを周知していくことを後回しにはできないという思いから、エリアを拡げた。

榎戸防災課長：課題が出てきたときに、本郷いきぬき工房はどのように対応するのかといった具体的なことが見えてこない。具体的にどのような対応をすることによって、死者をゼロにしていくのか、そのあたりのアイデアがあれば教えてほしい。

プレゼン団体：例えば、文京区主催の防災訓練を行った後で、フォローアップのステークホルダーミーティングをやりたいと思っている。正直、危機意識の共有をした後、どのように行動していくというのは、決まっていない。ただ、対応策のアイデアを出し合っていくのが大切だと考えている。正解がない課題であるので、企業や地元住民等周りの人を巻き込みながら、みんなで協議をしながら見つけていきたい。

榎戸防災課長：この会議体の結論が、区役所の防災課がこれをすればいいといったものだと公共の担い手という趣旨とは外れてしまう。自分たちは何をするのかという考えを聞きたい。

プレゼン団体：区民の課題として、危機意識を持っている人がほとんどいないので、こういった大変なことが起こり得るということを発信していくことに大きな価値があると考えている。多くの区民が、区役所が守ってくれると思っているので、区役所が守ってくれるわけではない、助けきれないということを伝えていきたい。

井上本部員：まず、すばらしいアクションを行ってきたということに感謝をしたい。新しい公共の取組を、数年にわたり、まっすぐやってきたということに敬意を示したい。運

営について、特に資金面はどのように考えているのか。災害はいつ起こるか分からないので、その時点その時点でのベストの答えを持っていることは重要。掘り下げて、今の段階の結論を出す。掘り下げ、今の段階の結論を出すというのを繰り返していく。今起きたらどういう原則で行動するかを、その都度定義していったほうがよい。

プレゼン団体：今回のプロジェクトとは別のところで、社会福祉協議会から、助成金をもらったり、災害ボランティア養成講座の企画に関わったりしている。要援護者の支援など、自分として一番関心のあるところは、このプロジェクトとは別のところで進めている。ただ、運営は大きな課題なので、相談しながらやっていきたい。

菊地本部員：自助、共助、公助といった時に、共助は共助でやってください、公助は公助でやってくださいというのは新たな公共が目指す姿ではない。それぞれをどう繋いでやっていくかということが重要なテーマである。そういった意味で、社協だけでなく、警察や消防との連携も必要になってくるのではないか。実際に災害が起こり死者が出たときに、それは私たちの責任、それは行政の責任と一方的に誰かが責任を負うのは違う。ステークホルダーミーティングで最後に出てくるアウトプットを公助の部分とどう共有するかというのを検討していった方がよい。

プレゼン団体：共助だけでいいのであれば、自分たちでやっていればいいのだが、やはり公助との連携が欠かせないと思っている。地域と地域をつなげたり、人を巻き込んでいくことが得意なので、専門家や企業・関係者をどんどん巻き込んで、みんなで話し合いを進めていければと考えている。

熱田オリンピック・パラリンピック推進担当課長 兼務 観光・国際担当課長：資料の中で観光スキルと防災スキルを身につけた観光ガイドを養成するとあるが、どのように養成していくのか。なかなか難しいことのように感じる。

プレゼン団体：介助スキル、防災スキルを持つ専門の団体はたくさんあるので、そういった団体と連携していきたい。また、実際に災害が起こったときには、その場所の地理を知っているということが非常に重要なので、地域の人にも関わってもらいながら、養成していければと考えている。非常に高いハードルだとは思うが、オリパラの開催まで5年間あるので、少しずつやっていきたい。

4　プロジェクトの選考について

選考委員の合議により、NPO 法人 ArrowArrow を「展開力向上」の区分で、文京かるた隊、本郷いきぬき工房を「継続力向上」の区分で支援することを決定した。ぶんきょう・いんぐれすについては、支援金の使い道等本部員からの指摘事項についての確認及びに計画の修正を前提として「継続力向上」の区分での支援を決定した。

5　その他

阿部協働推進担当課長：2014 年度以前に支援をした 4 団体の活動状況、2015 年度の重点テーマ、事業実施予定及び実施状況について説明。

井上本部員：全般的にすばらしいと思う。よいコミュニティを作りながら、継続的に場を作るということは、文京区にとって非常に意味があることである。

阿部協働推進担当課長：次回本部は 11 月 25 日（水）午前に開催する。

6　閉会

以上